

平成30年度 校内研究（現職研修）計画

研究テーマ

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり」－2年計画－
～アクティブ・ラーニングの視点からの授業づくりのプロセス～（1年次）

1 テーマ設定の理由

(1) これまでの研究と課題

「児童生徒一人一人のコミュニケーション力をはぐくむ授業づくり（3年間）」をテーマに平成27年度から行ってきた。それぞれ1年ごとにサブテーマを設けて、研究の方向性を明確にしながら進めた。

1年次は「児童生徒一人一人の気持ちを適切にくみ取り、主体的なかかわり合いをはぐくむ授業づくり」をサブテーマとして研究を推進してきた。それぞれのグループにおいて児童生徒が身に付けるべきコミュニケーション力がシート等の活用や協議によって焦点化されたり、チームティーチングの連携がより深まり、チームとして授業を構成したりすることができた。しかし、児童生徒が新たなコミュニケーションスキルを身に付けることができた一方で、それらが大きな集団の中や家庭など日常生活に生かされることが少なかったという課題を残した。

2年次は「主体的なコミュニケーションスキルの確立と般化をめざした授業づくり」をサブテーマとして研究を推進してきた。これまでの研究の成果等をつなぎ、積み上げる研究を推進してきたことで、児童生徒たちは新たなコミュニケーションスキルを獲得し、より大きな集団においてそれらの力を般化することができた。課題としては、ツールの再作成など評価と改善に活用されることが少なかったことや、日常生活、社会生活などより大きな場面で活かすことができるコミュニケーションスキルの定着が重要として挙げられた。また、学校と家庭・企業・福祉事業所・放課後等デイ事業所などとの連携、共有という観点で3年次へ引き継ぎ、ツールの作成へとつなげていった。

3年次の研究は「コミュニケーション力の拡がりと社会生活におけるスキル活用をめざした授業づくり」をサブテーマとして掲げて始まった。児童生徒に関しては、自らが自主性・主体性をもちながら日常生活、社会生活などより大きな場面で活かすことができるコミュニケーションスキルの定着をめざした授業づくり。さらに、学校と家庭・企業・福祉事業所・放課後等デイ事業所などとの連携による評価の共有をめざした。教員に関することは、学部を越えた「縦割り」の形で児童生徒の支援情報を共有・研究するなど、教師の協働と専門性・資質の向上。そして、相互に協調し合えるアクティブ・ラーニングを行うことで、よりよい連携と支援方法を導き出すことをめざした。

これらを通して、それぞれの研究グループから成果と課題としてあげられ大切にしてきたことや今後も重視したいことなどについては下記のとおりです。

(☆：成果 ★：課題)

☆興味関心の高いものを授業で取り上げ、展開を工夫することで学ぶ力が高まる。

☆ツールの活用を通して、また改善を重ねることで、行動の調節や気持ちの安定の向上が図られたり、子ども自身が思考・判断する場面が見られたりするなどが得られた。

☆話し合い活動により、相手とのかかわりの中でいろいろな意見に触れ、受け入れたり、自分の考えを伝えたりすることを通して、よりよい解決策を見出そうとする考え方ができた。

☆実態把握のためのツールの活用やKJ法による協議をすることで、子どもの課題がより具体的に授業づくりに反映させることができた。

☆具体的な場面設定でのロールプレイにより、相手とのかかわり方、話し方、考え方を学ぶ効果があった。

★子ども同士のやりとり、話し合いや何か困った時の相談など、思考・判断にアプローチするための場面設定の仕方が課題となった。

★適切なコミュニケーションができるような言葉の引き出し方を工夫する必要がある。

(家庭との連携を深める)

- ★よりよい人間関係を育むために、相手のことを考える機会を設け、適切な行動への導きが必要である。これからの生活に、これまで取り組んできたことが活かされるかどうか課題である。
- ★ある学習に至るまでに積み上げてこなければならない学習経験が不足しているため、子ども自身が自分の課題に気付きにくい。成功経験の積み上げ、系統性が必要である。
- ★社会生活へ搬化させるためには、その事象に関する場面設定や状況設定をした演習経験が必要である。
- ★関係機関との連携で、シートを活用することはできたが、子ども自身の自己理解への活用としては不十分だった。また、高等部3年生に関しては、進路決定に大きくかかわってくるため、評価の共有はできなかった。

(2) 本年度の研究

(これまでの研究における考察)

- 実態把握のために、学校と家庭あるいはその他必要な機関との連携・情報交換することは、適切な行動分析と適切な支援につながる。また、授業の振り返りでの検証においても、新たな実態の発見や授業の改善につながる。
- ある学習活動を成立させるためには、その学習に必要な基礎的知識・技能が重要であり、それを踏まえた上で、さらにどんな学習を積み上げていく必要があるのかを見極めながら、個別の指導計画に基づく指導を行う必要がある。
- 社会生活におけるスキル活用をめざすには、学校生活において、その場面や状況に関する学習経験を多く取り入れ、学習経験後のまとめや振り返りを充実させることで、それぞれの自己理解や他者理解さらに問題解決能力の向上につながる。
 - ※考察と平成32年度から施行される新学習指導要領で求められていること、さらに平成30年度教育課程の重点目標を踏まえ、アクティブ・ラーニングの視点からの授業実践を研究対象へとする。

(アクティブ・ラーニングの視点)

- 自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えることなどを通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現されているか。
- 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現されているか。
 - ※3つの視点を共有し、授業づくり・授業改善に向けた取り組みを活性化させ、学びの質を高めていくことを意図するものである。さらに、それを通してどのような資質・能力を育むかという観点から、学習の在り方そのものの問い直しを目指すものとする。

(知的障がいがある子どもの学習上の特性等を踏まえたアプローチ)

教える場面と思考・判断・表現させる場面を効果的に設計し関連させながら指導していく。(単元の構成に重要なプロセス=習得・活用・探究)すなわち、知的障がいのある児童生徒が、それぞれの理解の程度や実態等に応じながら自ら考え、判断し、表現していく学習活動が授業や教育活動の中に計画的・構造的に組み込まれ、展開されていく必要がある。

単元・授業前の計画→単元中の各授業→単元・授業後の振り返り→次の授業というサイクルにおける授業づくり、授業改善を図っていくことが、子どもの学びの充実につながると考える。新しいことを行うのではなく、今までの実績を踏まえた効果的な学びの広がり、高まり、重なりが求められている。

(研究のスタイル)

- 学習指導要領の改訂のポイントや主体的・対話的で深い学びの展開について、講義や協議を通して理解を深める。
- 授業づくりでは、児童・生徒の学びのプロセス＝教師の授業づくりのプロセスとなるよう授業づくりの過程を残すツールを活用し、単元・授業前の計画→単元中の各授業→単元・授業後の振り返り→次の授業のプロセスにおける協議を深める。
- 研究グループを学部あるいは縦割りで編成し、授業研究・事後研究において授業づくりの過程がみえる研究報告にする。

2 研究目標

(1) 全体目標（2年間）

- 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業を目指して授業研究と事後研究を推進し、効果的な学びの広がり、高まり、重なりという点から資質・能力を育む。
- 授業づくりに複数の教師でかわりながら授業研究と事後研究を深め、教師としての専門性と資質の向上をめざす。

(2) 年度ごとのサブテーマ

- アクティブ・ラーニングの視点からの授業づくりのプロセス（1年次）
- 学習状況の評価方法や観点・規準等による分析からの授業改善（2年次）

研修関連の語句

アクティブ・ラーニング…主体的・対話的で深い学び（詳細については上記を参照する）

学習の広がり…学んだことを生活や人生の様々な場面に結びついていく（般化）

学習の高まり…抽象的な思考を含めて、概念化や法則性等への気づきを促す（高次化）

学習の重なり…国語科で学んだこと、算数科で学んだことを相互に関連付けて、それぞれの見方・考え方を他の教科において活用することで考えをまとめたり、発展させたりする（輻輳化）

「主体的・対話的で深い学び」を展開する際の指導や支援のポイント

○plan ①授業や単元等を通して、育成を目指す資質・能力を明確に設定すること

②資質・能力の育成と関わって習得される知識や技能と、それらが活用されている姿、資質・能力がいつ、どのような場面で、どのように発揮されるのかを念頭に置いた評価方法や評価規準を設定すること

○do ①各教科等の本質に迫る「問い」、言い換えれば学習する意味の核心に迫る「問い」を、学習集団全体に対して、または個別の教育的ニーズに即して設定し、児童生徒に投げ掛けること

②児童生徒一人一人の思考や判断のプロセスに着目し、必要に応じて考え方の道筋を示したり判断の根拠となる事由等を更に引き出したりすること

○check ①計画段階で予め設定した学習状況を分析的に評価する方法や観点・規準等に即して児童生徒一人一人の変容状況を教育的視点から価値づけること

②授業や単元等を構成する諸要因をもとに、「授業の評価」や「指導の評価」を分析的に行うこと

○action①授業計画レベル、単元計画レベル、年間計画レベルでの目的・内容・方法・時間数等の見直し随時、または適宜行うこと

②どの時期（いつまで）に、どのこと（何）について、誰が、どのような方法で改善するのかを具体化して取り組むこと

習得・活用・探究…学習活動の類型を示したものの、これらの学習活動は相互に関連し合っている

○習得：基本的な知識・技能を習得する

○活用：それぞれの知識・技能を活用する

○探究：習得あるいは活用したことを、教科等を横断した問題解決学習や探究活動へ発展させる

資質・能力の3つの柱

- ①何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）
- ②理解していること、できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）
- ③どのように社会・世界とかがわり、よりよい人生を送るか

（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）

四観点・・・単元の目標あるいは単元の評価基準において用いられることが多い。

- 関心・意欲・態度
- 思考・判断・表現
- 技能
- 知識・理解

（「知的障害教育におけるアクティブ・ラーニング」武富博文 松見和樹）

3 研究仮説（上記の「研究のスタイル」に関連して）

新しい学習指導要領が求めている知的障がい教育に関すること、主体的・対話的で深い学び実現に向けた授業展開の工夫、アクティブ・ラーニングの授業実践例に関する講義や協議を通して、授業づくりの前段階での知識について学ぶ。

児童・生徒の実態や課題に応じた研究グループを編成し、児童・生徒の学びのプロセス＝教師の授業づくりのプロセスとなるような授業づくりの過程を残すツールを活用し、「習得・活用・探究」の学習活動の類型に基づき授業や単元ごとのまとめりで、「授業で児童・生徒がなぜ、何のために、何を、どう学ぶのかを教師がどのように設計し支援するか」や「設計された授業の中で児童生徒がなぜ、何のために、何をどう学んだのか」という視点で協議していく。

以上のような取り組みを通して、授業実践と検討を経て、単元・授業前の計画→単元中の各授業→単元・授業後の振り返り→次の授業というサイクルでの授業づくりが根付き、各研究グループにおける育みたい資質・能力や大事にしたい支援のあり方が明確になってくるとされる。また、「なぜ」「何のために」「何を」「どう学ぶのか」の観点で学習活動が整理できてくることで、テーマにある「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり」につながると考える。

4 研究構想

本校運営ビジョンでは「児童生徒一人一人の能力と特性に応じた自立の力を身につけ、豊かな心でたくましく生きていく人間を育てる。」ことを教育目標に掲げ、3つの「つ」（つなぐ、つづける、つみあげる）を重視し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりをめざす。

H30 重点目標

児童生徒一人一人に応じた学習を通して、知識・技能の習得を図り、深い学びが獲得できるように授業を工夫することで、様々な場面に対応できる思考力、判断力、表現力の育成をめざす。

(1) 研究の内容・方法

①研究グループについて

実態や課題に応じた学習集団を対象とした複数の指導者で、研究推進グループを編成し、グループごとにテーマとの関連を持たせ、テーマを焦点化した研究を行う。（学部や縦割りでのグループ編成で7グループとする）

○グループごとにテーマにせまる研究仮説と研究方法の計画を立てる。

○グループごとに授業研究・事後研究を積み重ねる。

②研修日について

○基本的に月1回の水曜日をグループ研究の日とする。

○時間は基本15：55～16：40を目安とする。

③校内研修・研究授業について

○校内研修会は年に3回実施する。

第1回校内研修会・・・講演形式 講師：国立特別支援教育総合研究所 主任研究員 横尾 俊 先生

テーマ 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり」（仮）

新学習指導要領が求めている知的障がい教育に関すること
知的障がい教育における授業展開の工夫
アクティブラーニングの実践 小学部・中学部・高等部

相馬市内の小・中学校 通常あるいは特別支援学級教職員、福島県内の特別支援学校教職員に案内する。

第2・3回校内研修会・・・研究授業 事後研究会形式 講師：東北福祉大学教授 大西 孝志 先生
校内の教職員のみで行う。

○研究授業は各グループ1回の実施とする。

- ・校内研修会時の研究授業・・・4つのグループから代表研究授業を選出し、全体での実施とする。
- ・その他の研究授業・・・グループごとに研究授業を計画し、授業参観や事後研究会を呼びかけ、学部単位での実施とする。

④授業づくりシート・指導案

○授業づくりのプロセスを残すためのツールとして、グループ研究の授業づくりの話し合いで活用する。

○指導案は校内研究テーマに迫るために、研修部提案の様式で作成する。

※様式は、別紙資料に掲載してある。

(研修部提案資料：「授業づくりシート」の活用に関して 「校内研究授業・学習指導案」の書き方)

○授業づくりで留意していきたいポイント

授業前 (単元・授業前の計画) → 授業中 (単元中の各授業) → 授業後 (単元・授業後の振り返り)

授業前 (単元・授業前の計画)

実態・見取り

- ・今回の授業に関する児童生徒の経験・技術・興味
- ・内面の推察 (要求・既有知識、自己認識、自己効力感など) からの見取り

めあて・予測

- ・今回の授業で育てたいこと、伝えたいこと
- ・四つの観点 (関心・意欲・態度、思考・判断・表現、技能、知識・理解) における本時の目標、評価基準
- ・予想される姿、発言

支援

- ・授業で取り扱う活動
- ・効果的と考えられる支援
- ・支援の意図
- ・環境設定

授業中 (単元中の各授業)

活動の様子・発言

- ・内面の推察からの見取り
- ・対話
- ・発言
- ・行動

振り返り

- ・児童生徒の自己評価
- ・児童生徒間の相互評価
- ・教師からの他者評価

授業後 (単元・授業後の振り返り)

評価

- ・目標に関する評価
- ・支援に関する評価
- ・内面の読み取りに対する評価
- ・予測との比較

今後

- ・今後の授業への申し送り
- ・課題
- ・アイデア

⑤中間協議会

○各グループにおける研究についての協議・報告を通して、全教員が所属学部以外の研究についての興味や関心を高め、相互に協調し合えるアクティブ・ラーニングを行うことで、よりよい連携と支援方法を導き出すことをめざす。

○各研究グループ計画と研究対象の児童生徒の課題について報告し、所属学部以外の教員も含めた複数の教員で協議をする。

⑥研修計画・まとめについて

○グループ研究の計画、まとめから、全体研究の成果と課題を焦点化し、次年度への課題や研究方法等を検討する。

※様式は、別紙資料として研修日に配布する。(平成30年度 グループ研究の計画・まとめについて)

5 研究組織



6 研究計画

今年度は、本テーマ1年次として、以下の計画で推進する。

月	全 体	各研究推進グループ
4	○校内研修全体協議会計画 (4/20) ・テーマの説明 ・本年度の目標、研究内容方法について ・校内研究推進グループの編成 ○研修日 (4/25)	・校内グループ研究テーマの設定に向けた話し合い (対象学習グループの課題や児童生徒の実態について情報交換)
5	○相特支研 (5/24)	・研究テーマ、研究計画の作成に向けた話し合い (授業の構想・単元の構想)
6	○第1回校内研修会 (6/8) → ○研修日 (6/13)	講演 (講師来校、外部案内) 講師: 国総研 主任研究員 横尾 俊 先生 授業づくりのプロセスについての研究 ・授業前 (単元・授業前の計画) <u>実態・見取り</u> 、 <u>めあて・予測</u> 、 <u>支援</u>
7	○研修日 (7/11) 各グループの研究テーマ、研究計画の報告 (資料酒配布)	・中間協議会の進め方について ・グループ研究の計画と研究の課題をまとめる。
8・9	○中間協議会 (8/29) ○研修日 (9/5)	・グループ研究の計画と課題の説明 ・グループにおける対象とする児童・生徒の課題の協議 ・授業前 (単元・授業前の計画)

		実態・見取り、めあて・予測、支援
10	○研修日 (10/2) ○第2回校内研修会 (10/18) →	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中 (単元中の各授業) 活動の様子・発言 振り返り 研究授業・事後研究会 () 講師: 東北福祉大学教授 大西 孝志 先生
11	○研修日 (11/6)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中 (単元中の各授業) 活動の様子・発言 振り返り
12	○研修日 (12/4) ○第3回校内研修会 (12/11) →	<ul style="list-style-type: none"> ・授業後 (単元・授業後の振り返り) 評価 今後 研究授業・事後研究会 () 講師: 東北福祉大学教授 大西 孝志 先生 ・授業後 (単元・授業後の振り返り) 評価 今後
1	○研修日 (1/10) ・各研究推進グループのまとめ ・研究の成果と課題について ・次年度のテーマ・方向性について	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ研究のまとめ (テーマについての成果と課題について)
2	○校内研修全体協議会報告 (2/26) ・校内研究の成果と課題及び来年度の方 向性	
3	○平成30年度研究集録の配布	